

# 手話通訳者のための漢語・漢字の知識を考える —「手話通訳技能認定試験」の問題から—

小 嶋 栄 子

## 1. はじめに

わが国の教育行政における漢語・漢字指導のマイナス面での状況については、古くは鈴木（康）編1977をはじめとして、かねこ2003に至るまで、それを指摘する数多くの報告がなされており、実際の教育現場からのそのような報告も、後を絶たない（日本教職員組合編2005）。

これは学校教育の問題だけではない。宮島2003は2002年度の日本語教育能力検定試験<sup>(注1)</sup>に関して、そこにいくつかの漢字に関する問題が出たことについて、その出題のしかたを次のように批判している。（行頭の数字は設問番号。各問いの正解とされるものには筆者がアンダーラインをつけた。）

### (5) 【書き順の最初が横画か斜め画か】

「1. 右 2. 九 3. 布 4. 友 5. 有」

そもそも正しい筆順として一定しているものはなく、かえっていろいろな筆順がある、ということを知っていることの方が大切なのではないだろうか。ましてや、外国人に対する日本語教育においては、筆順には国際性がなく、日本・中国間でも違いがあるということを知っておくべきであろう。

### (6) 【常用漢字<sup>(2)</sup>表で訓だけの漢字】

「1. 瀉 2. 菊 3. 繰 4. 箱 5. 畑」

2の「菊」が訓ではなく音であるというのは、かなり専門的な知識であり、音の典型的な例とは言えない。しかも「常用漢字表で」という但し書きから、「常用漢字表」を持っているか、覚えているかしていなければ答えられない愚問である。

### (7) 【片仮名・平仮名でもとになった漢字が同じか違うか】

「1. く・ク 2. と・ト 3. ね・ネ 4. ま・マ 5. ゆ・ユ」

「ま」の字源を「末」、「マ」の字源を「万」とすれば、4が正解となるが、

このような知識は日常生活においては関係がなく、専門家の領域である。

(8) 【仮名遣いの正解】

- 「1. つづく (続) 2. つづら (葛) 3. つづる (綴)  
4. ちぢむ (縮) 5. いちぢるしい (著)」

「ぢ、づ」が認められているのは連濁と連呼の場合であるが、「連呼」という述語は現代仮名遣いの規定以外では使われておらず、しかも現代語音に基づく仮名表記をすることを原則と考えるならば、「連呼」の「ぢ、づ」を認めるべきではなかったであろう。(個別に覚えなければならぬため)

(9) 【常用漢字表の付表にあるかないか】

- 「1. おととい (一昨日) 2. きゆう (昨日) 3. ほんじつ (本日)  
4. あした (明日) 5. あさって (明後日)」

常用漢字表を持ち出すまでもなく「ほんじつ」が仲間はずれになるのは明らかである。

結論として宮島2003は、一全体として、日本語教育に必要な枝葉の知識のテストが多すぎる。日本語教育能力検定試験が選抜試験ではなく、検定試験であることを考えればなおさらである。また、漢字を使うのに直接必要のない知識とそれを裏で支える知識との区別をしなければならない。一という主旨を述べて、その論をしめくくっている。

そこで、本稿においては日本語教育能力検定試験とほぼ同時期に始まった検定試験であり、しかも厚生労働大臣公認という、より公的な性格の強い手話通訳技能認定試験(以下「士試験」と略す)についても、どのような漢語・漢字の問題が出題されているのかを調べてみることにした。

士試験は、手話通訳士の資格を取得するために1989年度から始まり、今年度で18回目を迎えている。社会福祉法人聴力障害者情報文化センターが「手話通訳技能の向上を図るとともに手話通訳を行うものに対する社会的信頼を高め、聴覚障害者の社会参加を促進し、併せて手話の発展を図り、もって国民の福祉の増進に寄与すること」(実施要項より)を目的として実施している。(受験資格は20歳以上で、毎年受験者は700名前後。合格率は10~15%)

2003年度から「国語」の得点は60%以上取らなければ合格できないことが明文化され、受験のための参考図書の一つとして『常用漢字表』が明記された。それによって手話通訳士の一般常識としての全体的国語能力の最低ラインが示された

と同時に、「漢語・漢字」の知識に関しては、受験者たちの学習すべき範囲が明確にされ、その負担が軽くなることに期待が持てるようになった。

本稿は、これまでの土試験で、「漢語・漢字」の知識について、どれほど受験者に負担を強いるような出題がなされてきたかを指摘し、その上でこれからの「漢語・漢字」に関する出題方針が常識的なものへと改革されることを目的とするものである。

まず土試験における漢語・漢字の位置づけを、その「受験の手引」から確認しておくのと次の通りである。

一般に、通訳者は、通訳すべき話の内容を正確に理解し、把握したうえで、的確に言い換えたり、まとめたりして、通訳しなければならない。このためには、まず、国語についての確実な基礎知識とともに、その理解力や運用能力が必要である。従って、総合的な国語力を問うため、次の各項目等について出題する。

- ① 発音のしかた、音の区別、アクセントなど
- ② 単語（言葉の意味、類義語、同音異義語、和語、漢語、外来語、新語、慣用句など）
- ③ 文法（品詞、文の構造など）
- ④ 文字（漢字、仮名遣い、表記法など）
- ⑤ 表現法（敬語の使い方、諸種の文章の書き方など）
- ⑥ 文章読解（やや長文の論理的な読解・要約など）

（アンダーラインは筆者がつけた）

それでは、土試験の具体的な設問をみながら考えていきたいと思う。

## 2. 和語・漢語・外来語

現在わが国で使われている単語は、その出自の違いによって大きく和語、漢語、外来語、混種語の四つの語種に分けることができる。

’98年度〈国語〉

[17] 次の四つの語はすべて漢字で表記されているが、この中には和語・漢語・外来語が交じっている。その語種の説明として正しいものを、下の中から一つ選びなさい。

時雨（しぐれ） 合羽（かっぱ） 行脚（あんぎゃ） 歌留多（かるた）

1. 漢語、外来語、和語、外来語

2. 外来語、漢語、和語、漢語
3. 和語、外来語、漢語、外来語
4. 和語、漢語、外来語、和語

【正解3】

この設問では漢語の例として「行脚（あんぎゃ）」が取り上げられているが、これは唐音の読み方をする漢語である。

わが国の漢字の音読みの種類には、呉音・漢音・唐音がある。

呉音は、古く5～6世紀に入ってきた音で、中国南方の発音に基づいているといわれ、仏教関係の漢語に多く用いられ、日常語にも多く残っている。漢音は、中国北方の発音に基づいており、7～8世紀、朝廷が漢字の正しい発音として奨励してきたもので、これがおおもととなって、現在の漢音の体系ができあがっている。唐音は、鎌倉・室町時代になって入ってきた音であり、呉音や漢音に比べて数も非常に少なく、日本語内における漢字音としても体系をなしていない。

つまり、「行脚」のように唐音で読む漢語は、呉音や漢音ほどには漢字の音として一般的ではないのである。漢語としての単語を出題する以上、日本語の中で大きな割合を占めている呉音や漢音のものを提示して、受験者の常識を問うという姿勢の方が大切なのではないだろうか。

また、このような設問において、「日本語の語彙には和語・漢語・外来語があり、それらにはどのようなものがあるか」ということを問いたいのであれば、それぞれにおいてごく一般的なもの（たとえば、和語であれば「山（やま）、川（かわ）など」、漢語であれば「学校（ガッコウ）、少女（ショウジョ）など」、外来語であれば「ケーキ、ナイフ」など）を提示すべきだろう。

さらに、問題文で示されているように「漢字で表記されている」場合にと限定したいのであればなおさら、和語を漢字で表記するときには、「水（みず）、火（ひ）」などのように訓読みをして一つの漢字が単語をあらわしているようなものを、そして漢語を漢字で表記するときには「水道（スイドウ）、火事（カジ）」などのように二つの漢字を音読みにして、漢字が単語の要素として使われているような典型的なものを出題するべきであろう。

和語の中では、設問の「時雨（しぐれ）」のように熟字訓と呼ばれるものは非常に数が少なく、和語の漢字表記の代表的なものとは言えないのである。

外来語は普通はカタカナで書くのだが、この設問のように漢字で当て字をされて表記されることもある。「合羽（カッパ）」はポルトガル語の capa から、「歌留多（カルタ）」はポルトガル語 carta からの外来語である。この部分に関しては「タバコ」を「煙草」、「ビール」を「麦酒」というように漢字表記するような

ものが出題されなかつただけでも良しとするべきかもしれない。

### 3. 音読み・訓読みなど

漢字の字音に関しては、「沈丁花（ジンチョウゲ）」「供養（クヨウ）」「夏至（ゲシ）」「言語道断（ゴンゴドウダン）」「下足（ゲソク）」のように呉音を含む読み方を知っているかどうかを問うものが多い。

— '92年度〈国語〉 —

[9] 下の語のよみがなとして正しいものを下の四つの中から一つだけ選びなさい。

「供養」

1. きょうよう      2. ぐうよう      3. ぐよう      4. くよう

【正解4】

— '95年度〈国語〉 —

[15] 「素焼」の「素」と同じ読み方の語を、下の四つの中から一つだけ選びなさい。

1. 素足      2. 素材      3. 素行      4. 素人

【正解1】

上記の1995年度の設問では、「素」は呉音が「ス」、漢音が「ソ」であるのだが、日本語の中で使われていて、呉音の「ス」が用いられる漢語は「新漢和辞典（改訂第二版）」（大修館1982）によれば、「索性（スジョウ）」ただ一つである。そして、それ以外は「素手（スで）」「素颜（スがお）」のように重箱読みのもとなり、これも非常に数が少ない。その数少ない「素（ス）」を使う単語が、この設問のように堂々と出題されてくると、まさに重箱の隅をつつくような設問と言いたくなってしまい、まるで漢字の呉音の読み方を知っているということが、漢字の読みに対する「知識がある」とでも明言されているかのように思われてくる。

重箱読みや湯桶読みに関しては、次のような設問内容の程度であれば適切であると言えるだろう。

— '94年度〈国語〉 —

[10] 漢字二字で書かれる単語のうち、上字を訓で読み、下字を音で読むものを「湯桶読み」という。三語とも湯桶読みになるものを、下の四つの中から一つだけ選びなさい。

- |    |     |     |     |
|----|-----|-----|-----|
| 1. | 石 偏 | 石 段 | 夕 刊 |
| 2. | 碁 石 | 石 鱈 | 切 符 |
| 3. | 磁 石 | 化 石 | 団 子 |
| 4. | 墓 石 | 石 灰 | 荷 物 |

【正解1】

また、「素人」を「しろうと」と読むような熟字訓についても、次のような設問があったのだが、選択肢として出されているものが適当と言えるだろうか。

— '99年度〈国語〉 —

[12] 次の文の空欄に入る最も適切な語を、下の中から一つ選びなさい。いわゆる熟字訓とは、[ ] のように、連結した漢字による表記全体を訓読みにすることである。

- |               |                |
|---------------|----------------|
| 1. 三毛猫 (みけねこ) | 2. 団子 (だんご)    |
| 3. 五月雨 (さみだれ) | 4. 伝馬船 (てんません) |

【正解3】

まず「三毛猫」では、「猫」という漢字は常用漢字表に含まれていない。

「団子」は当て字である。

「五月雨」「伝馬船」は（「素人」も）、常用漢字表の「本表」ではなく「付表」にある読み方である。

以上のことから、逆に言えば本表に入れる必要がない程度に特別な「よみかた」をするものなのであるから、「三毛猫」も「団子」も「五月雨」も、結局はひらがな表記で充分であるということにならないだろうか。

「伝馬船」についても、たとえ漢字で表記する必要があるとしても、もはや歴史の中に登場するもの以外は考えられず、日常生活に必要な読みであるとはどうてい思えない。

つまり、士試験は公的な試験であることをうたっているが、わざわざ常用漢字表の中心をなす「本表」にある漢字の読みを避けて、設問が作られているのである。

次の二つの設問も同様である。

— '89年度〈国語〉 —

[14] 「あまりにもむごたらしい事故現場を見て（ ）とした。」という文の（ ）に使えないことばを下の四つから一つだけ選びなさい。

1. 愕然      2. 慄然      3. 欣然      4. 呆然

【正解 3】

'00年度〈国語〉

[12] 次の文の下線部の読みとして正しいものを、下の中から一つ選びなさい。

長年の夢がかなって、欣喜雀躍する。

1. きんきじゃくやく                      2. きんきじゃくよう  
3. かんきじゃくよう                      4. かんきじゃくやく

【正解 1】

1989年度の「愕」「慄」「欣」「呆」、2000年度の「欣」「雀」は、すべて常用漢字表に含まれていない。

行政側で「この表は、法令、公用文書、新聞、雑誌、放送など、一般の社会生活において、現代の国語を書き表す場合の漢字使用の目安を示すものである。」と、法的な強制力はないとうたっているとしても、一般常識として知っておかなければならない漢字の目安を定めておきながら、その域を出た設問をすることは、その試験に対していたずらに受験者の負担を大きくしていることになるのではないだろうか。

その上、「欣喜雀躍」というような古めかしい言い方の意味を尋ねることによって受験者の知識をはかろうとする姿勢は、手話通訳士という職業が、「今・現在」の日本語を話す人々を主に相手とする、ということを考えれば、なおさら見なおす必要があるように思われる。

訓読みについては、次の設問のような設問があった。

'92年度〈国語〉

[10] 「生」という漢字を「生蕎麦」の下線部とおなじに読む単語を下の四つの中から一つだけ選びなさい。

1. 生ビール              2. 生 簀              3. 生醤油              4. 生 花

【正解 3】

常用漢字表では「生」には、「いきる、いかす、いける、うまれる、うむ、おう、はえる、はやす、き、なま」などの訓があるとされている。これだけの訓があるような漢字は他にはない。つまり「生」は例外的な漢字なのである。

選択肢に示されているものの一般的な読み方は、「生ビール（なまビール）」

「生簀 (いけす)」「生醤油 (きじょうゆ)」「生花 (いけばな)」であろうが、「簀」「醤」は常用漢字にはない漢字である。また設問文の「蕎」も常用漢字にはないもので、「蕎麦 (そば)」という熟字訓もその付表にない。

さて、以上の読みのことは一步譲ったとしても、設問文の「生蕎麦」を「きそば」と読むことができるのは、「生」の訓に「き」があることを知っているからなのではなく、／きそば／そのものを知っているからだと言えないだろうか。(／なまそば／と読む「生蕎麦」も実際にあるのだから。)

つまり、この設問は本当に「生」という漢字の読みを聞いているのか、それとも／きそば／というものを知っているかを聞いているのか、どちらの知識を問うているのかわからなくなっているのである。

#### 4. 漢語の意味

2000年度には、次の設問のように漢語の意味を直接問う設問が出題された。

'00年度〈国語〉

[13] 「下足」という語の意味として正しいものを、下の中から一つ選びなさい。

1. 催し物などに集ったおおぜいの人<sup>1</sup>が脱いだ履物。
2. 催し物などに集ったおおぜいの人<sup>2</sup>が履きかえた上履き。
3. 催し物などに集ったおおぜいの人<sup>3</sup>が持参した上履き。
4. 催し物などに集ったおおぜいの人<sup>4</sup>が脱いだ下駄(げた)と草履。

#### 【正解1】

上述の「素」同様、「下」を「ゲ」とあまり使わない呉音の方で読ませた上に、その中でも「下水」や「下車」のように一般的によく使われるものではなく、現在では日常生活においてほとんど使われなくなっている「下足」の意味を尋ねている。

下足(げそく)とは、もともとの漢語の意味としては、足ののろい馬、身分の低い者をさす意味であったのだが、日本では、1の「催し物などに集ったおおぜいの人<sup>1</sup>が脱いだ履物」の意味として用いられるようになっている。そして「下足番」「下足料」「下足札」という語をも構成し、これらの略としても用いられているのだが、「手話通訳士」という資格にとって、この単語の意味を知っているということにどれほどの意味があるのだろうか。

まさに、現在使われている「下(ゲ)」の使い方のうち、典型的ではない例を出していて、これも受験者に差をつけるための設問と言えるだろう。



古めかしい感じのする漢語を知っているかいないか、ということで知識をみよ  
うとする傾向の設問は、次のように最近のものの中にもみられる。そして2005年  
度の設問では、凸面鏡の「とつ」だけが漢音で、他はすべて「慣用音」である  
という「漢字音の性格」という知識まで要求されている。

— '02年度〈国語〉 —

[15] 次の文の空欄に入る最も適切なものを、下の中から一つ選びなさい。

「華燭（かしよく）の典」とは、かなりかたい表現であるが、  
「                    」のことである。

- |                 |                |
|-----------------|----------------|
| 1. 国賓を招いての宮中晩餐会 | 2. 結婚披露宴       |
| 3. 結婚式          | 4. お盆の灯籠（ろう）流し |

【正解 3】

— '05年度〈国語〉 —

[15] カッコ内のように読んだ場合、下線部の漢字音の性格が他の三つと異  
なるものを下の中から一つ選びなさい。

- |                 |                |
|-----------------|----------------|
| 1. 漁師（りょうし）     | 2. 千石船（せんごくぶね） |
| 3. 凸面鏡（とつめんきょう） | 4. 反物（たんもの）    |

【正解 3】

次の設問に至っては、「退治る」という単語を使って設問を作った出題者の常  
識をも疑ってしまうほどである。（しかも、士試験の受験の手引きの参考図書に  
は「古典」を除くという但し書きがある。）

— '02年度〈国語〉 —

[13] 次の文章の空欄に入る最も適切な語を、下の中から一つ選びなさい。

日本語の動詞の中には、漢字の音読みの語に活用語尾をつけて動詞とし  
て使用するものがある。例えば、「だべる（駄弁る）」・「退治る」・「もく  
ろむ（目論む）」・「〔     〕」などである。

- |         |        |
|---------|--------|
| 1. しゃがむ | 2. そねむ |
| 3. ひがむ  | 4. りきむ |

【正解 4】

この設問は品詞の転成（ある品詞から他の品詞に転じ、新しく別の単語を作る  
こと）についてのものである。設問文中のものは「駄弁」「退治」「目論」という  
漢語の名詞が、それぞれ「だべる」「たいじる」「もくろむ」という動詞に変化し  
たものとしてあげてあるが、「たいじる」などという単語が今どき使われるだろ

うか？ 日常会話ではもちろん、少なくとも筆者がこれまで読んだ近現代の小説の中でも出会ったことはない。

また、設問文でこのような2字の漢語名詞から動詞となったものをあげたのであれば、選択肢中の正解にも同様に「ぎゅうじる（牛耳る）」のようなものをあげるべきであろう。

次の設問は漢語の意味についてであるが、士試験の設問としてやはり疑問が残る。

'02年度〈国語〉

[9] 「一」という漢字が「校庭を一周する」の「一」と同じ意味で用いられている語を、下の中から一つ選びなさい。

- |       |       |
|-------|-------|
| 1. 一任 | 2. 一変 |
| 3. 一掃 | 4. 一転 |

【正解4】

設問の「校庭を一周する」の「一周」は、「二周、三周、四周……」というように、「一」を序数としてとらえた用い方をしている。

選択肢をみると、1・2・3では明らかに「一」を「すっかり。まるごと。」のような意味で用いていて、それぞれがそれだけで漢字の二字熟語として成立しており、序数としての使い方ではないことがわかる。

そこで、受験者は選択肢4の「一転」について、たとえば「二転、三転……」という言い方を思いつき、「一」が序数として用いられることがあると考え、一応これを正解とするだろう。

けれども「一転」は、「彼が現れたことで、その場の状況が一転した。」のように、「まるっきり変わってしまう」という意味で用いられることもあり、常に「一周する」の「一」と同じ意味で用いられているとは限らないのである。

設問にあるような問い方をすれば、「一回」や「一等」など、「一」が常に序数として用いられる典型的なものを正解として用意すべきであり、受験者を故意に迷わすような選択肢は避けるべきなのではないだろうか。

結局、士試験の漢語・漢字に関する設問のしかたの姿勢は、次の設問に代表されているような気がしてくる。すなわち、「漢語で表現されたり、漢字で表記されているものをありがたく思い、それに関する知識をより多く蓄えている人が手話通訳士として適任である。」という考え方である。

[19] 次の文の（ ）にあてはまる表現はどれか、下の四つの中から一つだけ選びなさい。

日本語におけるフォーマルな表現の特徴は（ ）である。

- |                |                 |
|----------------|-----------------|
| 1. 漢語表現が多いこと   | 2. 簡潔な省略表現が多いこと |
| 3. 直接的な表現が多いこと | 4. 数量的表現が多いこと   |

【正解1】

この設問は、現実のフォーマルな話の中では漢語表現が多くなることを指摘しているが、漢語表現が多いこと（多すぎること）の是非については言及していない。

フォーマルな表現をすべて否定することはできないが、わかりにくい単語が数多く使われる表現は避けるようにする、という基本的な姿勢を持つことの方が大切であると思う。漢字の音は日本に入ってきたことで四声などが消滅して簡略化され、同音異義語が非常に多くなっている。そのため、漢語を使うよりも外来語（いわゆるカタカナ語）を使った方が意味が伝わりやすい、という場合も多い。

松浦2002の示した例がある。

「ある時、学生たちに『皆さん、ケン持っていますか。』と聞いたら、ほとんどの学生に通じなかった。代わりに『皆さん、チケット持っていますか。』言い直したらすぐに通じた。」

国立国語研究所「外来語」委員会2006は「分かりにくい外来語の言い換え」を提案したが、言い換えられたものを見るとかえって分かりにくくなっているものも多い。

## 5. 最後に

漢字が読める・読めない、漢語の意味を知っている・知らないということに大きなウェイトをおいた試験で、知識の優劣を求めることは明らかに間違っている。士試験の漢語・漢字の設問は、一般常識としての漢語・漢字の知識を備えていることをみるためのものとすべきであり、これからは少なくとも常用漢字表以外の漢語・漢字の設問はするべきではないと考える。

士試験は大学入試のような選抜試験ではない。誰もが、目指せば合格できる可能性のある資格試験である。いたずらに周辺的な出題をすることはやめにして、ごく常識的で中心的な設問をすることで、受験者の「漢語・漢字」の知識をはかってほしいものだと思う

## 【参考文献】

- かねこ・ひさかず2003「日本語表記のための漢字の問題 —漢字指導のころえとして」『国文学解釈と鑑賞』（平成15年1月号）至文堂
- 国立国語研究所「外来語」委員会編2006『分かりやすく伝える 外来語 言い換え手引き』ぎょうせい
- 小嶋栄子2002「国文法用語の将来」『国文学解釈と鑑賞』（平成14年1月号）至文堂
- 小嶋栄子2005『手話通訳者のための国語』クリエイツかもがわ
- 三省堂編修所編1984『新しい国語表記ハンドブック 第二版』三省堂
- 手話通訳士試験問題解答委員会編「手話通訳技能認定試験模範解答集」第4～17回（1992～2005年度）（財）全日本ろうあ連盟他
- 日本教職員組合編2006『日本の教育第55集』アドバンテージサーバー
- 松浦 明2002（談）「秋のローマ字会」日本のローマ字社主催2002.11にて
- 宮島達夫2003「日本語教育と漢字の知識」『国文学解釈と鑑賞』（平成15年7月号）至文堂

★以下の文献からは、直接引用はしてなくても多くの示唆を受けた。

くれ さちえ2003「外国人のための日本語文法と日本人のための日本語文法」『国文学解釈と鑑賞』（平成15年7月号）至文堂

鈴木康之編1977『国語国字問題の理論』（教育文庫12）麦書房

- ①宮島達夫1958「言語政策の歴史」
- ②鈴木康之1970「言語政策と国語教育」
- ③鈴木康之1975「最近の国語問題の動向とこれからの国語教育」
- ④鈴木重幸1961「文字の表音性と表意性」
- ⑤宮島達夫1969「近代日本語における漢語の位置」
- ⑥宮島達夫1970「和語の漢字表記」
- ⑦鈴木重幸1964「現代かなづかいの意義」

鈴木康之他2003『日本語学の常識2003年度版』海山文化研究所

日本教職員組合編1978『国語・文学の教育』一ツ橋書房

明星学園・国語部1969『にっぽんご7 漢字』むぎ書房

（ここにあげた各著者の氏名表記は、当該論文表記にしたがった。）

\*\*\*\*\*

（注1）財団法人日本国際教育協会が、「日本語教員となるために学習している者、日本語

教員として教育に携わっている者等を対象として、その知識および能力が日本語教育の専門家として必要とされる水準に達しているかどうかを検定すること」を目的として実施する日本語教育学会認定の試験。

2006年度（10月15日試験実施）で20回目。受験資格は制限なし。毎年受験者は5000名強で、合格率は20%弱（約1000名）。

（注2）昭和56年（1981）10月1日内閣告示第1号。1945字。「前書き 1 この表は、法令、公用文書、新聞、雑誌、放送など、一般の社会生活において、現代の国語を書き表す場合の漢字使用の目安を示すものである。」

本稿は、口頭発表「教育行政は漢語・漢字指導をどうとらえているのか」2003.5.30「月末金曜日の会」（日本語文法研究会主催）の原稿をもとに、大幅に加筆修正したものである。